

## 教育における最後の砦は企業にあり

鍋島 一博

「教育の源泉は家庭にあり、最後の砦は企業である。」と私は長く信じて来た。家庭の中で幼子は言葉を覚え初期の人間関係を知る。親の庇護を離れ、保育園、小中学校、高校、大学と進み、多くの教育を受ける。その間塾へも足繁く通い勉強し続ける。最高学府を卒業し晴れて就職をする。企業で待ち受ける初めての教育は、挨拶・返事、お辞儀の仕方、敬語の使い方等である。教育というより訓練と言った方が良いかも知れない。企業は、二十歳を過ぎた青年に「ハイ」という返事から教えるのである。人間がこの世に生まれて成人するまで、挨拶・返事を教わる機会がなかったとは言えまい。それでも、おはようございますと言った基本的な挨拶や返事さえマトモに出来ない新人が多く、企業は仕方なく金をかけて再教育するのである。この企業内教育をすり抜けてしまった者は、成長する機会を失う。教育の最後の砦が企業にあるという所以である。しかし、近年、社会構造が変化し、この最後の砦が崩れ始めている。企業は新人を育てる余力がなくなって来た。

右肩上がりの経済成長は幻想となり、企業における終身雇用や年功序列も急激に崩壊しつつある。新人を企業の色に染まるよう一から育て上げ、企業に対する忠誠心を確固たるものにすることによって日本的雇用関係を築いて来た構造は、持続できなくなってしまった。終身雇用・年功序列に寄りかかり、会社にぶらさがり、基本ができない、仕事ができない、といった高コストの人間は人員整理の対象となる。給料分を

稼ぐだけの人間は必要とせず、会社に多大の利益を挙げられる人間だけが価値ある人間であるとの評価を得る。企業は自らを救うために高コストの人間を切り、低コストでありながら仕事ができる派遣社員やパートを増やしている。しかも、内部にあっては報酬体系を実力・評価に見合ったものに変えようとする動きが大企業を中心に盛んである。一方の中小企業は、元々十分な報酬など出せない。優秀とされる学校を出て大企業に就職し人生安泰だと思えた日本社会は、戦後数十年を経てようやく夢から覚めたと言えよう。多くの会社人間が終身勤められると踏んでいた居場所がなくなり、望むと望まざるに関わりなく外の社会に放り出されることになったのである。実力主義でキャリアを積みながら成長し報酬も上がっていくという理想の社会から、現実には程遠い。日本的経営の名残が負の遺産となり人材の流動化も十分ではない。実力とは何かという捉え方もできないでいる。現実には一度職を失えば過去の報酬は約束されない。年齢が高ければ高いほど深刻である。それでも終身雇用や年功序列が罷り通っている職業集団が未だにあり、社会に歪みをもたらしている。いずれ近い将来、この集団も変わらざるを得ないだろう。

厳しい実力社会の中で生き抜き、より良い人生を送るためには師が必要である。導く師が存在してこそ自らの行く道を望むことができる。二十歳の時、小池教授の研究室を叩いたことが、私にとって人生の扉を数ミリ開いたことになっ

た。これは大きな一歩だった。己を導く師を持つことは幸せである。教養課程の教育心理学教室が面白く、小池榮一教授のゼミを選んだことが、結果的に私の人生を成功に導いた。人生の成功は他人の評価ではなく自らどう思うかである。半世紀に及ぶ私の人生がより良い方向に導かれて行った最大の原因は、小池先生との邂逅ではないだろうか。小池先生と初めてお会いした時、先生は私の言葉遣いについて論された。「父母のことを、他人に対してお父さんお母さんと言うようではダメだ。」二十歳にもなる人間が敬語の使い方さえ分からないでは、何をか言わんやである。ゼミに入ると、先生からの薫陶は絶大であった。合宿で一人一役を言い渡され、皆それぞれ頑張った。企業に入れば当たり前のことを、学生時代は大変だと思っていた。合宿の打ち上げでは一人ひとり馬鹿をする。先生が言うには、「バカの出来ない人間はものにならない」ということだった。十九、二十歳は格好をつけたがる世代である。私も例外ではなかった。格好良く振る舞ったつもりでも、実は格好悪いという具合だったと思う。先生の言葉によって己の虚飾を捨て去ることができた。

小池先生からの指導は、挨拶・返事・靴揃え(後片づけ)、Doing の精神、三ム(ムリ・ムラ・ムダ)の排除、その他数え切れないほどの事柄に及んだ。これらの教えは企業に勤めて以来、様々な場所で考え方の基本となった。人生にとって大切なことは何か？自分の生き方はこれで良いのか？人間は自問自答しながら生きている。会社に入っても、この仕事は自分がしたい仕事なのか、やり甲斐はあるのか、と思い迷ってしまう。将来のことを聞かれてもどうしたいのかわからず仕舞いである。迷いながら小池先生にお会いすると、仕事に打ち込みなさい、出世を目指すのではなく気が付いたら他人が担いでいる人間になりなさい、と励まされた。人から自然に持ち上げられる人間になるにはどうしたら良いのかと思っていた矢先、社内勉強会の面倒を見る機会があった。彼らと学習しているうちに、

人を指導していくことの楽しさと育った時の喜びを感じた。企業内教育の重要性を実感した瞬間だった。教師になれなかった自分でも人に影響を与えられる人間になれるのだ、という思いだった。小池先生にこのことを話すと、教師になれなかったのではなく、教師にならなかったと言いなさい、君は立派に企業内教育を成し遂げているのだから、と言われた。先生のこの言葉は、私の人生にとって重い一言だった。学校教育では成し遂げられないことを企業では出来るのだ、ということを確認したのである。企業には目標がある。それは崇高であり人の役に立たなければならない。金儲けだけが目的ではない。目標があるからこそ良い仕事を成し遂げようとする。そこに企業の存在価値がある。社員にも自己実現という目標があり、仕事を通してそれに近づくことができれば理想的である。しかし、昨今は両者を一致させることが難しくなってきた。企業は社員の成長に責任を持たず、自己責任原則を要求している。教育の限界は、どれだけ環境を整えても、本人の自覚、意欲、やる気、実践がなければどうにもならないということである。ただ、外部から刺激を与えることはできる。しかも、導く優れた師がいてこそ伸びる芽が育つのだ。すべて自己責任では才能も埋もれてしまう。三十年にわたる小池先生の薫陶により、私は自らの才能に目覚め、少しずつ伸ばして来られたと確信する。“企業は人なり”と言われる。企業経営者としての私は、後進の指導に力を尽くし、未来永劫続く企業を支える人間、小池先生の教えが脈々と流れ受け継がれていく人間を、一人でも多く育てていきたいと決意している。